

巻頭言

年頭挨拶

理事長 大熊 幹章

平成19年の年頭に当たり、皆様に新春のご挨拶を申し上げます。

一昨年の11月に森林総合研究所創立百周年記念式典を行い、昨年は次の100年へのスタートの年でありました。折しも第1期中期計画から第2期中期計画への切り替えの年でもあり、新しく策定した第2期中期計画に沿って既に初年度の事業が開始されています。運営費交付金等の大幅削減など大変厳しい情勢の中で、林木育種センターとの統合を成功させ、高いレベルで業務の実績を上げて行かねばなりません。役職員の意識改革が不可欠です。



さて、一昨年の創立百周年記念式典において、森林総合研究所の存在の意義、使命、あるべき姿、役割をミッションステートメントとして世の中に公表・宣言いたしました。このミッションを旗印に所員一同業務に努めているところですが、実際には具体的なフォローアップを行っているとはいえません。「森林と木材による理想的な循環型社会を形成する」というこのミッションをどのようなスケジュールで、どのような方策を持って実現するのか、またミッションを果たすことによって社会の仕組みをどのように変えるのか等について、全所員でしっかりと議論し、明確な考えを持つべきであると思います。

このような考えから、所内の戦略会議の中に「中長期（差し当たって2050年までを想定）の森林利用のあり方」を考察する検討会を立ち上げました。私は、2050年における「森林と木材を基盤に置く循環型社会の形成」に関わるシナリオを設定し、それを達成するために必要な研究開発のロードマップが作成出来ないものかと期待しております。この作業が今後の研究展開の単なる見通し、説明に終わることなく、森林と木材を基盤に置く新しい社会の仕組みを創出するという大きな課題への取り組みとして捉えたいと思います。そしてこの作業の中で21世紀を支えてゆく森林総合研究所の役割とその重大な任務を所員が自覚し、またそのことを社会にアピール出来ればよいと考えます。

森林総合研究所と林木育種センターの統合が平成19年4月に控えています。この統合において最も重要なことは、運営費交付金の削減はもとより業務の効率化、組織のスリム化など行政改革の大変厳しい流れの中で、業務の一体的実施、効率化により統合のメリットを最大限に発揮出来る体制を早急に整え、業務の実績を格段に向上せしめることだと思います。何としても、我が国の森林・林業・木材産業の発展のために、統合体となる新しい組織のもとで森林総合研究所を飛翔せしめねばなりません。

新しい年を迎え、所員の皆様の頑張りに期待するとともに、関係各位のご支援、ご協力を切にお願いし、新春の挨拶と致します。